



真言宗 豊山派
 金色山吉祥院大悲願寺住職
 あきる野市教育委員長

かとう しょうゆう
 加藤 章雄氏

—大悲願寺の見どころを教えてください。

お寺というのは仏事を行うところだけではなく、一般の方が境内に入ってきて、「ああ、来てよかった」と感じていただけて、また、地域の人に愛されるお寺じゃなくてははいけませんね。そのひとつの証として、このお寺は、800年間一度も火災に遭っていないことです。それはつまり、お寺と地域が常に密接に連携しあって、「開かれたお寺」というかたちで、来てくれ守ってくれている人がいるということが一番大きな理由なんです。

以前は、この寺の前に蒸気機関車が通っていたので、この周りは火災に遭うことが多かったんですね。五日市へ行く方は上り坂なので、ここで蒸気をふかすわけです。そこで火花が飛び散って、茅葺屋根に落ちて燃えてしまうんです。観音堂や山門にも火花が飛んで、煙が出ることもありました。それでも近所の方が「煙が出てるわよ」と教えてくれるんですね。地域の人に守られてお寺がある、それが大事なことだと思うんです。

また、仏教界でも花の寺、「百花寺」というものをやっています、「萩の寺」として百花寺のひとつに指定を頂戴しています。皆さんに、境内に来て花を見て、来てよかったと感じてもらおうことが住職の役目のひとつだと思っています。百花寺としては、白萩で登録していますが、春夏秋冬いつ来ても何か花があるように努めています。春になるとムラサキツツジが、5月の連休ごろには、大きなボタンが咲くんですよ。夏になればサルスベリが、9月になると、シラハギが咲きます。秋になればモミジが色づき、冬になって野生のスイセンが咲き始めます。1年通すと、そういう感じで花が咲くわけです。

—そういったお寺に対する御住職の思いの中から、今回の観音堂修復につながったのですね。特に修復したいというお気持ちが強かったところがありますか？

やはり観音堂は、国の重要文化財の仏像をお預かりしている以上、それを安置する観音堂の整備は第一の役目で、そういう意味から、雨漏りがし始めたということは、一番心を痛めるところでしたよね。

以前の修復で、火災から仏像を守る、寺を守るという意味で瓦屋根にしたのですが、それだけ重いものが載って、なおかつ下の柱はそのままのものになっているので、地盤沈下というのは当たり前前のことでしたね。

—そういうところから修復を？

そうですね。それから修理をしていただけたことになった際には、やはり屋根を茅葺きにしたいという意向はあったのですが、今度はメンテナンスが問題です。それで茅葺き銅板屋根にさせていただいたわけです。本来は茅葺きに戻すべきでしょ

うし、茅葺きは温かみがあっていいですけど、やはりメンテナンスという点から見ると難しい。その辺は、以前、都指定の本堂を直していただいた時にもつくづく感じていたので。

—銅板葺きにしても、周りとの風景が損なわれていないですね。

そうですね、それは大切な要素だと思いますね。やはり大悲願寺は後ろに山を抱えていますし、その手前の御堂というのはそれなりに考えて修復していかないと、住んでいる人の意向だけで補修できるものではないですね。

—工事中に苦労した点というのはありますか？

私自身としては、彫刻を活かしたかったんですね。計画では、彩色の復元はなかったのですが、途中から急遽、彩色していただきました。色については、3、40年建ったときに、これ位燻るだろうという色を研究して、その色を塗ってほしいということで、非常に苦心して塗っていただきました。非常にありがたかったです。

—工事は何年かかりましたか？

3年です。観音堂も、230年たっていますが、この修理で、これから100から200年位は大丈夫だろうと思います。メンテナンスさえちゃんとしていけば、4、500年は残っていくわけです。そういう意味では日本の文化というか、木造建築の文化のすばらしさが、寺の御堂を見ていますと、よくわかります。また、屋根の工事にあたって、神社仏閣では当た



重要文化財 木造伝阿弥陀如来及び脇侍千手観世音菩薩・勢至菩薩坐像